



2011・12

SORA 40号

鬼の女房

柴田 佐知子

稲雀無敵の数となりけり
子が誇る傷は小さし秋高し
蟻蚶とぶ音と思へりまだ見えず
弟はいつも元気で草の絮
頼られてばかりの神や黍嵐
一位の実急ぐことなき父の日々
満月や鬼には鬼の女房ゐて
先の世の蟻螂の斧隠し持つ
名月や水のごと来る太郎冠者



田のものを田に焼き秋を惜しみけり

銀漢や筆をもて死を賜りぬ

国境はすべてわたつみ石露の花

大白鳥の為に一席設けたる

海のものまだ動きぬる年の市

金目鯛目玉ばかりの頭となりぬ

神々を闇に押しやる越年火

食べてゐる貌は見せざる嫁が君

寒紅引く立ちし噂も華として

船団を雲が押し出すみあれ祭

宗像大社・みあれ祭

海上神幸大波を先立てて

荒灘のいよいよ荒ぶみあれ祭

月光

高倉和子

ふるさとの水の甘さや小鳥来る
校長の挨拶長き運動会
月光に攫はれてゐる村ひとつ
家系図の胡散臭さや秋暑し
新しき刈田の匂ひ広がれり
ゆつくりと振り向く牛や花芒
登山道より山霧の降りてくる
ひとところ幼き色の山紅葉
ポインセチア母の体の頼りなし
看病の背をさするのみ冬銀河



若狭

中田みなみ

冬めくと朝の会話の辻りだす
白鷺の舞うて若狭の冬田打
灯りても宿場は暗し花八ツ手
寺坂に木の実雨降る猿の墓
墓守りに焚火匂ひの孫が蹤き
大根引き了へても尼の前かがみ
如何かと老尼をのぞく赤蕪
弘法水飲めますと札冬青草
遺されし者に重しよ古日記
旅囊負ひ千鳥の足跡に続く



門

荒井千佐代

城の古址二句

城址は巨石だまりや木の実落つ

石仏に魂の鎮もる草の花

聖鐘のとよむ一湾きび熟れて

どの皿もパセリの残り秋祭

枢出す門のコスモス踏み倒し

野辺送り稲架林立の畦道を

水際を歩くこちや蕎麦の花

わが視野の端に干乾び鴟の糞

北窓を閉ざす我が身の門も

亡き母の櫛を使へば虎落笛



父兄席

服部早苗

土曜日の更待月のほうと出づ

悩み事聞く冬瓜の後頭部

子規の忌や揚げたてカレーパン一つ

体育の日の卵焼甘くする

同点の歓声に沸く夜食かな

秋うらら小さき木椅子の父兄席

秋風に園児の祖母として歌ふ

猫じやらししばらくじやれてゆきし猫

われを呼ぶ声ののりくる刈田風

語り継ぐ真実ひとつ衣被



猿
茸

柴田志津子

神幸の楽が近づく放生会

伶人のひとり振り向く月の渡御

諸九尼の生家杜なす秋の蟬

年貢米収めし蔵の荒れて秋

豪農の墓石高し天高し

野鼠に夜は囃さるる案山子かな

女帝陵あれば高きに登りけり

無頼派の終の栖やきりぎりす

玄洋社墓地ひろびろと秋の声

万病に効くと貰ひし猿茸

隙 間

踏面に見えぬ花野を振り返る
去ぬ燕みたびまはりてさやうなら
穂を垂れていつちやうまへの余り苗
蜂蜜を買ふ秋霖のテントかな
神の留守隙間のあれば覗きけり
酒蔵の裏の刈田のせまいこと
突つ掛けでどこへでも行く神の留守
みそこなふ八重山吹の返り咲く
行くあてもなく氈瓜かもうりは屋根の上
張り替へし襖の上の遺影かな



だいじみどり

一族

鳳

蛮華

鱗雲

高倉恵美子

秋暑し港の見えぬ港町

鱗雲夢も希望もありし頃

風下へ花をすぼめて秋ざくら

一村を呑みこんでゐる曼珠沙華

一族の空に出揃ふ秋つばめ

秋暑し友と三人死ぬ話

受話器通して秋麗を分かち合ふ

弟も老いたり今年米届く

団栗が地球をノックする音か

不自由な足を撫でゐる秋の暮

満ち潮の水面しづもり十三夜

新しき農具大きく稲の秋

原子野の忘れな草や彼岸花

リハビリに疲れて戻るやや寒し

木の瘤に木のわだかまり秋深む

衰へぬ口が頼りや花八つ手

寒鰯

秋 千 晴

山粧ふ

安 武 晨 子

台風の新しき空連れて来し

中空は風の通ひ路山粧ふ

爽やかや山彦もまた澄み渡り

彼岸花石組あらし岡城址

馬追を手の隙間より見せてをり

行く秋の風にさやげる雑木山

穂芒に撫でられながら下山する

峡の日のひかりに応へ穂の芽

家の灯を消して満月入れにけり

秋灯下眺めて遠きものばかり

取り合ひし千歳飴もう置き去りに

秋草の活けられしより野を忘れ

寒鰯を斜めに入るる勝手口

松手入哀しみひとつつつ捨てる

冬ざれの門を早めに閉ぢてをり

亡き人に文まだ届く雁来月